令和５年度第１回十和田市総合教育会議　会議録

日　時　　令和６年２月５日　午前 10 時 00 分より
場　所　　十和田市役所　本館３階　庁議室

出席者　　十和田市長　　小山田　久
十和田市教育委員会　教 育 長　丸井　英子
〃　教育長職務代理者　斗沢　一雄
〃　委　　員　大柳　均
〃　委　　員　深瀬　郁子
〃　委　　員　小笠原　拓司

十和田市教育委員会事務局　教育部長　　小川　友恵
〃　教育総務課長　乗田　育人
〃　指導課長　　佐々木　隆一
〃　ｽﾎﾟｰﾂ・生涯学習課長　坂下　淳
〃　教育総務課長補佐　櫻田　悟
〃　指導課長補佐　　山田　勇一
〃　指導課　指導主事　對馬　拓也
〃　指導課　特別指導教育専門指導員　柴田　拓也

教育部長	・本日は、ご多用にもかかわらず、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。 ただ今より、令和５年度第１回十和田市総合教育会議を開催いたします。 はじめに、市長からご挨拶をお願いいたします。
市長	あいさつ（略）
教育部長	・ありがとうございました 続きまして、次第２の議事に入りますが、ここからの進行は市長にお願いしております。市長よろしくお願いします。
市長	・それでは、次第２の議事に移らせていただきます。 「十和田市の特別支援教育」について、事務局から当該事業の説明をお願いします。
指導主事	説明（略）47 分 07 秒
市長	・ただいま説明が終わりました。委員の皆様には、今の説明の中でご質問だとか、ここはどうなってるのかだとか、そういったご意見はございますか。 ・よろしいでしょうか。 ・それでは、この後意見交換に入りますが、その時でもよろしいですのでお願いいたします。

	・それでは、今の特別支援教育について、委員の皆様に何かご意見等ありましたらお願いいたします。 ・人数も少ないですので、私の方から指名してお話ししていただきます。 ・まずは、斗沢委員お願いします。
斗沢委員	・對馬先生と柴田先生に質問を一つだけしたいと思います。よろしくお願いします。柴田先生が今年度から動いてもらって、十和田市の特別支援教育がこんなにすごくやっているんだなということを改めて知るところとなりました。どうもありがとうございます。その中で、WISC-4 を初めて耳にしたのですが、今まで私たち小さいときから IQ でとってきて、最近は IQ とかあまりしないよという話も耳にするのですが、現状で IQ をやっているのかどうかということと、WISC-4 というのが、必要な子ども達だけにやっているのかということを教えていただければありがたいなと思います。
市長	・お願いします。
對馬指導主事	・ご質問ありがとうございます。２点ご質問がありましたが、あとの方から先にお答えいたします。WISC-4 は全員に行うものではなくて、特別な支援が必要かどうかと、要は在籍変更を検討するお子さんに対してのみ実施いたします。２つ目の現状で IQ を活用しているのかというご質問についてですけれども、IQ をメインにするためにこの検査を行っているのではなくて、あくまでも子どもの何が得意で何が苦手なのかというのを調査するために行っております。ですから、数値だけに踊らされるのではなくて、子どもの全体像を見て我々は判断するようにしております。以上でございます。
指導課長	・あわせて、１つ目の質問の方ですけれども、十和田市では小学生、中学生それぞれ１学年だけ市の予算で知能検査を実施しております。それは、WISC とは別の教研式の検査ということでよくご存じの普通の知能検査なのですけれども、小中学校全体にやることになっております。
斗沢委員	・ありがとうございました。十和田市の特別支援教育のこと、正直言ってこれまで知らなくて、こんなにすごいんだということと、児童生徒がすごく多いというのがびっくりしました。そうなると、先生方がそこまで本当に対応できてるのかということがすごく不安です。柴田先生が今学校を回ってやってくれているということなんだけれども、なかなかそれだけで足りるのかなという、先生方の専門知識を向上させるために努力はされていると思いますが、ひとつこれからも子どもたちが増えている現状を見ると、もっともっとやらなきゃならないし、特別支援の支援員を十和田市ではかなり増えてきていることで、今 47 名でそれが多いか少ないかなちょっとあれなんですが、子どもの数から見ると二百何人いますし、私は県立なので、特別支援学校は重度だと２人に先生が１人、普通学級だと４人に１人付くのが一般的だそうです。その通りになっていないということなのですが、それからすると、先生方、支援員も含めると、もっともっと支援者が増えてもいいのかなという感じがしています

	ので、何とかこれからも市長さんが来年度の予算に一つ考えて欲しいなと思っています。これだけ生徒数、支援を要する子どもたちが多いというのにびっくりしました。だけども、それ以上に十和田市が力を入れてもらっているということで非常に安心しています。これからも一つよろしくお願いします。
市長	・分かりました。ありがとうございました。 ・続いて深瀬委員お願いします。
深瀬委員	・学校での支援教育はすごく手厚いなと今の説明を聞いて感じました。その一方で、十和田市は幼児の療育センターとか発達支援の施設がとても少ないんじゃないかなという話を耳にすることがあります。保健センターで実施されている幼児の発達支援事業の役割が、とても大きくなってくるのではないかなと思います。特別支援教室の先生のように幼児の支援事業にも専門的な関りが必要なのではないかと思います。赤ちゃんから就学前までの発達段階を把握して、保育を行っている幼児の療育や障がい児保育を学び、支援しているなどの幼児の専門家を配置することで、学校へのつながりをより深めることができるのではないでしょうか。つまり、保健センターでの幼児発達支援事業を発展させていくことも、特別支援を考える一つになるのではないかと思って提案させていただきます。
市長	・提案ありがとうございます。まずは皆さんの意見を伺いたいと思います。 ・続いて大柳委員、お願いします。
大柳委員	・まず、この資料を見たときに、支援員の数が 1.9 倍になっているということに非常にびっくりしました。これだけすごかったんだなと、今まで何も考えてなかったなと。柴田専門員の話を聞いたときに、ものすごくきめ細やかにやってくれているんだな、これだけやってくれていたら、これまでの生徒たちももっと良かったのかな、このように考えました。非常にありがたく思っています。一つ質問は、今だいたい通常学級に何人くらい支援が必要な子どもがいるのか知りたいなと思います。
市長	・事務局どうぞ。
對馬指導主事	・ご質問ありがとうございます。今年度、通常学級で支援が必要な児童生徒、学校から上がってきている人数ですけれども、その割合としては、10.1%となります。人数でいうと、小学校 187 名、中学校 83 名となります。以上でございます。
大柳委員	・通常学級で授業しているわけですよね。ということは、先生方が非常に苦労しているんじゃないかなと思っていました。それで、先生方の考え方も変えていかなくちゃならないなと思って、研修会とか様々やっているんですけども、何かさっきのグラフ見ると７回と書いてあるのですが、一つの学校では年に１回とかですか。

對馬指導主事	・ご質問ありがとうございます。全ての学校において、特別支援教育に関する研修会は行っております。年に１回以上は行っております。その中で、柴田指導員が派遣されていくのが小中学校では年７回であって、全部の小中学校で研修会は実施しているものであります。以上でございます。
大柳委員	・私、過去に学校にいて、年に１回じゃ全然足りないなと思いました。なかなか先生方の考え方、気持ちを変えていくのは、何回もやらないと変わらないと思います。そういうことで、もっともっと増やしていけたらなと思っていました。以上です。
市長	・小笠原委員お願いします。
小笠原委員	・ご説明、本当にありがとうございました。詳細に渡ってご報告いただいて、大変分かりやすく聞かせていただきました。その中でお聞きしたいのが、一点目ですけれども、園なり小中なりという機関がございますけれども、そういった部分で障がいの特性とか把握するのに関して、連続性が確保されているとやはり支援の仕方ってまた深みが増すのかなと感じたところです。現状、そういった順に上がっていったときの情報の連携がどのようにされているのかというところをお聞きしたいと思います。もう一つは、制度が変わって 10 年少々で、親御さんの選択で通常学級だとかを選べるようになったということでございますが、10 年くらいが経過して、最初のお子さんはたぶん大人になっているのかなと思いますが、そこで、親御さんの立場なのかご本人の立場なのか、結果でですね、制度が変わってからやっぱりこれを選んで良かったなと何か評価する指標ってあるのかなと思って、ちょっと難しいところはありますけれども、もしかしたら先ほど八高に入れるなんてすごいなと思ってみてましたが、それが一つの評価なのかもしれませんけれども、何か評価指標みたいなものがあればお聞かせいただければと思います。
對馬指導主事	・ご質問ありがとうございます。一つ目の幼保小中の連携のことについてです。十和田市では、毎年１月に幼保小連携教育研究会を行っております。年２回行っておりますが、毎年１月に全ての園の先生方に一堂に集まってもらい、そこに市内の小学校の先生方にも来てもらって、全ての幼児について、小学校への入学にあたっての情報提供をしていただく場を設定しております。主にその場で情報を連携すると。それ以外にもう少し時間をとって情報提供が必要だという場合は、独自に園のほうから小学校への情報提供ということで進めております。小学校から中学校に進学するにあたっては、小学校の先生と中学校の先生とで情報共有をして進めております。二つ目の制度が変わってから評価する指標ということでご質問いただきましたが、指標というものはお答えするのが非常に難しいなと。大変申し訳ございません。ただ、児童生徒が自己実現に向けて、先生方が何とか努力しているところではございます。以上でございます。
市長	・最後に丸井教育長、お願いします。
教育長	・特別支援教育という、特別という言葉が付くために何か特別な子と特別

	じゃない普通の子ってどうしても言葉からそうイメージするものですけれども。すべての子に個性があるんだと。その個性に合わせた教育をしていこうという中で、特に支援をしていく教育と捉えていただければいいかなと思います。決して差別したり住み分けするものではございません。その子が二次障害を起こさずに自分の個性を伸ばしていければ一番社会に適応していく力が付きます。小学校の時に自分の感情をコントロールできない子も、その子の感情の背景にあるものをしっかりと周辺の者達が捉えて、その子の感情をどうコントロールすればいいのかっていうことを行動面とか様々な人との関わりの中で行動様式とかを学ばせていけば、大人になったときにはその子に合った環境の中で自分の良さを伸ばしていける。それは、知的な部分であっても、情緒障害の部分であっても、その子に合った環境の中で社会生活ができると考えております。ですから、今は特別支援教育に関しては社会の中でまだ誤解を持っているかたもいらっしゃいます。ただ、学校としては、先ほど大柳先生が、先生方は何回も研修しないと中々頭が固くて変わらないんだと仰ってましたけれども、どちらかというと小学校のほうが研修が盛んに行われてきました。でも今は、中学校も学校独自で研修会を年に４回も５回も開いてくださったり、校長先生自ら悩みを抱えている親御さんに面談してくれたりして、よりそってくれている。校長先生が自ら動いてくださっていて、特別支援教育を理解しないと生徒指導ができない、いわゆるがちがちの生徒指導、かつて校内暴力とかで荒れていた時の対応のような生徒指導は今はできない、不登校も同じで、全て不登校は家庭の問題ではないかとか本人の学校に行きたくない、怠けたいという気持ちではないかとか、そういうものではないんだと。その子なりにいろいろな困り感があって、学校に来れないという子もいるんだと。ですから、その行動の裏側を私たち学校関係者、教育者が理解していかなければいけない。そしたら、その時にどう言葉をかけていったらいいのか、どう家庭と連携していったらいいのか、どう関係機関と繋げていったらいいのか、自分たちが苦しむのではなくて、多くの方の協力を得ながら学校教育、そしてその子たちのニーズに合わせた教育ができるのかということをこれからも教育委員会として指導する立場ですけれども、学校とともに連携していきたいなと思っております。以上です。
市長	・ありがとうございます。皆様のほうからいろいろご意見がありました。人数が増えている、よく気付くようになったということももちろんあろうかと思いますが、しかし、丸井教育長からも話があったように、その子に合った教育をしていく、これが基本だと思っておりますので、そういいう意味では、当市の場合は、まだ充分じゃないのかなと思っております。私、前に保育士の皆さんとお話ししたときに、保育所でそういう子どもたちの指導というか扱いが大変だというお話を聞きました。現在、就学前は保健センターで、就学後は学校の方でと分かれているわけでございますが、先ほど深瀬委員からもお話しがありました、どれくらいの人数が相談に来ているか分かりますか。保健センターにいっている子ども達の人数。
對馬指導主事	・こちらでは把握しておりません。
市長	・それも保育所の方から、それぞれの小学校に入学する時に情報の共有は

	あるようですので、そういう意味では特に問題はないように思います。支援の人数だとか、今予算をやっておりますので、そのようなお話がありましたが、何か少しでも進めたいなと思っております。それから、こういう会議はもう少し早くやれないものなのですか。
教育長	・前向きに検討いたします。予算前に検討いたします。
市長	・今日の議題でもなくてもいいので、せっかくの機会ですので、何かありましたら。
大柳委員	・（挙手）
市長	・大柳委員、どうぞ
大柳委員	・少し考えていることが。多分難しいと思うのですが、特別な才能がある子どもがいますよね。私は過去に車の事なら何でも知っている子どもがいました。どんな車も全部当てるんです。その子どもに応じた指導というか手立てというかそういうことができるようになれば、さらにいいのかなと思っておりました。なかなか難しいと思いますけれども。以上です。
市長	・他になければ、この会を閉じさせていただきます。よろしいですか。それでは事務局にお返しします。
教育部長	・以上をもちまして、令和５年度第１回総合教育会議を閉会いたします。本日は貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。